

平成 26 年 №47  
はつはる号

# あきばさん

発行所  
秋葉山 新井寺  
272-0144  
千葉県市川市新井  
1 丁目 9 の 1  
でんわ 047-357-8319  
FAX 047-357-8399  
mail: info@shinseji.jp  
http://www.shinseji.jp  
郵便振替 00150-2-282968  
発行人 新井寺

## 年頭のごあいさつ

### 当山住持

平成二十六年の年頭にあたり、当寺檀信徒の皆様、当寺秋葉講中各々、および有縁無縁 世界中の信心の願主、すべての方々の平和を心よりご祈念申し上げます。

新井寺では、昨年も大晦日から元日にかけて、毎年恒例の「年越坐禅会」を修行しました。午後十一時半からの一炷（いっちゅう）の坐禅の後、午前〇時半よりご本堂において、ご本尊さま、一仏両祖さま、伝燈（でんとう）歴代祖師方、檀信徒皆様方のご先祖さま、有縁の仏さま方に真心をこめて新年のご回向を申し上げます。さらに秋葉山（あきばさん）のご真殿（しんでん）に上殿し、いま生かされている檀信徒ならびに秋葉講の皆様、当日参詣修行



一昨年前「ネパール仏蹟参拝の旅」の折、「ルンビニー（お釈迦さまご生誕の地）」で現地の和尚さんにわけていただいた菩提樹（ぼだいじゅ）。持ち帰った当時は 30 センチくらい。いまは約 70 センチ。持ち帰った 7 本のうち 4 本が大きく育っています。

の皆様、あらゆる方々の平和を同心同行にご祈禱いたしました。すべてのお勤めが終わり、新春茶話会では、皆でお互いの平和を念じながら、寺族が用意したささやかな正月料理とご神酒で新年を寿ぎました。

私たちが仏教徒の原点は「お釈迦さま」であり、お釈迦さまのみ教えは、世界の生きとし生けるすべての人の平和であり、正しい信仰心です。

さらに道元禅師さまは、その信仰心の第一歩が「坐禅」であるとお説きくださいました。「宗教の時代」と言われるようになって久しい昨今、坐禅は、日本全国、世界各地において大流行、大ブームとなつていきます。坐禅は、作法にしたがつて姿勢をまっすぐに正し、足を組み・手を組み、呼吸を調べて「ただひたすらに」坐る、それだけであります。どうぞ、皆様におかれましても、本年はお釈迦さまの平和へのお導きの原点である「坐禅」を行ってみてはいかがでしょう。新井寺では、月例坐禅会を行っております。

本年も、どうぞ、よろしくお願い申し上げます。心豊かな年でありますように。

合掌

# あけましておめでとぅございいます 今年もよろしくお願いいたします



早いもので、大本山永平寺を送行（そうあん・おいとま）して今年で二十年になりました。思い出される事があります。永平寺での初めての転役は「大庫院（だいくいん）」でした。「典座寮（てんぞりょう）」とも呼ばれる永平寺の台所、調理場です。道元禅師様は「典座」という職に修行の重きをおいていました。ここには、典座老師という方がいらつしやいます。典座老師は、「何事にも真心をこめて」と私共修行僧によくおっしゃっていました。午前一時半に起床し、午後十時半に就寝する日が多々ありましたので、疲労と睡魔から、ただただガムシヤラに調理に臨む事も出てきてしまいました。

ある日、典座老師から「あなたには、心がないのですか？ 一生懸命と『真心をこめる』という事は違うのですよ」という言葉を頂きました。その場はただショックで落ち込んでいました。

その日の夜の坐禅中、ふと気づいた事がありました。坐禅堂の横には小川が流れていて、その留まることなく流れる水の音に、上山以来何ヶ月も気づかずでした。修行生活をただ流れに任せて、その流れも如何なるものか気づかず、ただ日々を送っていたのではないか。

当時確かに、典座老師と一緒に、同じ食材から、同じ調味料、同じ火加減、同じ量やタイミングで調理しても、同じ味にはなりません。何が足りないか。それが「真心」なのです。その「真心」が如何なるものかわからねば、こめる事もできません。味として出る事ありません。これは料理だけではありません。日々の全ての事に言える事なのです。

正に「何事にも真心をこめて」。

合掌



今年のテーマは「ホッとできる存在」とした。どういう和尚であれば、安心して気軽に相談ができたり、ホッとさせることができるのか。

以前、ある人が「和尚さんは人間関係のプロでなければならぬ」と言っていた。そうならば、いつも眉間にしわを寄せているような近寄りがたい雰囲気和尚であるよりは、気軽に話しかけられる雰囲気を持つ人のほうが和尚に適していると思う。しかし、私は前者のほうである。忙しくもない日常をバタバタと過ごしながら、「私は今忙しいので近づかないで」という雰囲気を出している。人と関わることを心の何処かで面倒くさがっていることに気が付いた。その為、周囲に不必要な緊張感を与えてしまっていた。人間関係のプロとなるには、日常の人間関係を楽しむことが大切なことではないか。それは、普段からほろ酔い気分を感じて人と接する人柄、西田敏行さん演じる『釣りバカ日誌』の浜ちゃんはそのイメージにぴったり当てはまりそうだ。

「そばにいるだけで、ホッとできる雰囲気がある人」。そんな人の傍にいと「心の空間」がすうーと埋まる感じがする。ほろ酔い気分な感じに「こやかに声をかけてみる。「どうぞですか」と。限定した質問ではなく、どうとでも答えられる質問を相手に投げかけてみる。それは「こちらが聞きたいことを聞く質問でなく、相手が話したいことを話すきっかけをつくる質問」。そんな心と心のやりとりが、近寄りがたい存在から「ホッとできる存在」に変わっていくのかもしれない。



いよいよ、東京オリンピックピックまであと六年となりました。昨年、オリンピック招致のプレゼンテーションで用いられた「お・も・て・な・し合掌」は流行語大賞を受賞し、一躍、注目の言葉となりました。

さて、この「おもてなし」、実行しようと思うと、ちよつと大変です。

①ま心を込めてお世話をさせていただきたいと意を決し ②その為に、季節や趣味嗜好に合ったものを整え ③それにふさわしい身のこなしをする」といった、物心共に相当な労力が必要な行為です。けれども、このような「おもてなし」を受けた方は、その行為に対し思わず掌を合わせたくなるのではないのでしょうか？

掌を合わせることに「合掌」は、決して仏様の前、仏事ごとの時だけではありません。合掌とは「右ほとけ 左しゅじょう (衆生・自分) と掌わす手の 声ぞゆかしき 南無の一声」との歌の通り、右の掌の仏様と左の掌の自分をしっかりと合わせ、仏様と自分とが一つになる姿です。アジアの仏教国では、人に会うと合掌をして挨拶をします。仏様への祈りだけではなく、人に向かって合掌をすることは、相手に深い尊敬の念をはらい、感謝する心の現れです。お金では買えないプライスレスな「おもてなし」の尊い行いに、思わず合掌してしまうのは、互いに感応道交した、この気持ちを重なり合わせた姿でしょうか。

今年、午年。午が九頭「ウマくいく」一年となるよう、互いに合掌し合える毎日をご過ごししていきたいものです。本年もよろしくお願いいたします。合掌



今年、午年。元氣印の母が元氣ならば、九十六歳。その母も、この一月十日で十七回忌を迎えます。

このお寺に嫁ぎ、四十年が過ぎました。新年のはじめに、その一年がどんな年であつてほしいのか、改めて考えたことはなかつたような気がします。お正月といつても「家族やご縁の皆様が健康で幸せでありますように」とご本尊様に掌を合わせるだけでした。「後期高齢者」といわれる歳になり、やりたいことは山ほどあつても、若いころのようにはいかななくなつてきました。上手に歳を重ねていくには、自分自身の健康に気をつけなければということを感じています。

これまで、お檀家様と秩父三十四観音・坂東三十三観音・西国三十三観音、百観音をお参りさせていただきました。「元氣なうちに四国八十八カ所をお参りしましよ」という皆様のお声に背中を押していただいて、今年こそはと、願っています。今年もよろしくお願いいたします。合掌



子どもの頃、父（新井寺の方丈様）と本堂のお供え物を買っていくことが好きでした。その時に、父がよく言っていたことがあります。

「仏様にはいいものをあげるんだよ」。仏様は目には見えません。食べることや話すこともできません。だからこそ、「気持ち」が大切なのだということをお父から教えてもらいました。

私は、父に教わったことを「花屋」として実行します。「仏様に最高のお花を」。この言葉をモットーに、皆様に「いい花」を提供します。皆様方の想いを「花」という形にして、皆様の大切な人にお届けします。

二〇一四年一月十二日、新井寺の境内に小さな花屋「花屋秋葉山（はなやあきばさん）」がオープンします。仏様のお花だけではなく、皆様が元気になれるようなお花も販売します。

どうぞ、お出かけください。花屋秋葉山でお待ちしています。（花屋・卯どし）

へ花屋 秋葉山 へ  
営業時間 九時～十四時 その他ご希望に応じて 定休日 水・木  
お花 一本 二百円 へ、  
お墓参りのお花 一対（十本）千五百円 へ



「新年の抱負を」と思いをめぐらすとき、畢竟するところはいつも同じなのではないかというような気がします。年が暮れるころ、自分はどのように一年を勤めることができたのだろうかとかえりみると、ほど遠い自分に気がつきま

す。「日暮れて道遠し」とはこういうことをいうのでしょうか。だからこそ、いつも同じようなことを「抱負」としてしまってもいいかもしれません。けれども、同じようなことを志しながら、まったく同じではないということにも気がつきます。それは、自分の志や想いは、いささかなりとも成長し、熟されていくからなのだろうと思います。

いつでも・どんなことでも「ていねい」でありたい。それが、ひそかにわたしが

志していることです。「ていねい」ということの積み重ねが、自分の半歩一歩の安定感や安心につながっていくということに気づいたからです。「人生はしあわせを求めての旅路」だという人がいますが、「しあわせは、いま・ここをおいてほかのどこにもない」というのがお釈迦さまの教えです。そのことを考えると、一つひとつのことに「安心」していくことが、わたしの「しあわせ」ということなのだろうと思います。

本当の安心は一生けん命心配して努力して、自己を見失わんように工夫し、一步一步油断なくギユツギユツとやって、いつも地に足がついて初めて、そこに安心が見出されるのである 澤木興道老師

「心配」とは、心を配ると書きます。一つひとつのことに心を配る。身心を尽くす。「ていねい」ということにも似ているような気がします。いま・ここ・このことにどっしりと身心を構えて向き合うそれが、「地に足がついている」ということなのだと思えます。一生懸命に心配してこつこつと「ていねい」を積み重ね、安心を育てていこうと思います。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。（当山 副住職・編集小子・未どし）